

式年遷宮に見る「共生と循環」



宮下 亮善

式年遷宮とは、伊勢神宮における二十年ごとに、内宮、外宮の本殿及びすべての末社などを新しく立て替える「皇室」のもっとも重要な祭りである。

その歴史を辿れば、六八五年《天武天皇十三年》に国家の制度として決定され、六九三年《持統天皇四年》に第一回の式年遷宮が行われた。一三二八年前のことである。今回で第六十二回目で、二〇一三年《平成天皇二十五年》に行われる。

この式年遷宮の意義はどのようなものでしょうか、考えてみたいと思います。《木々の緑

は年毎に新しく芽吹き、ひそかに枯葉を落とす。新宮は松の緑にひとしい、新緑ともいえる新宮を周期的に造営し、神の輝きを仰ぐ。それが、永遠の生命活動というものである。

他文献引用》

何故、今、式年遷宮なのか、現在世界中を席卷してやまない、アングロサクソン流グロ―バリズムの嵐は、行き過ぎた市場原理主義や株式至上主義を助長し、徹底した競争原理を押しつけ、富めるものはますます富み、貧しきものはますます貧しくなるという二極化を推し進める。まさに、統治分割する西欧合理主義の原理であり、他の神の存在を認めようとならない一神教的世界観がその行動指針となっている。ラビ・バトラ―教授の言をかりれば、まさに搾取的資本主義が世界中を跋扈している。環境を破壊し資源を浪費し続けるならば、早晚、その資本主義そのものが破綻

するかも知れません。否、寧ろこのような文明は破綻したほうが良いかも知れない、世界中の二割のいわゆる先進国の人々が、八割の貧困者の上に成り立っている現状はどう見てもまともな姿ではない。自分さえ良ければ他の人はどうでも構わないという社会は、憎悪と憎しみを生む。イスラム原理主義の台頭も遠くは植民地支配の総括を怠ってきた西欧列強の怠慢であり、排他的一神教的世界の矛盾が露呈し、どうにも相手を抹殺しなければ収まらない様相を呈している。何せ、主要宗教の信徒数の内、三二%がキリスト教、一九%がイスラム教、〇・二%がユダヤ教、つまり世界の主要宗教の半数が、一神教を標榜する宗教に所属しているわけである。ハンチントン教授ならずとも「文明の衝突」が危惧されるわけです。

このようなか、一九八六年一〇月二十七

日教皇ヨハネパウロ二世が、イタリア、アツシジで、世界宗教者代表百名を招き「世界平和の祈り」を捧げ、多文化宗教という概念を提唱し、その地域の伝統、歴史、精神的なもの文化を取り組み、諸宗教間の対話と協力を要請するに至ったことは、それまでの西歐的価値観の限界を露呈したといえます。

今、まさに宗教を「文化」として捕捉する時代が到来したといえます。古来、日本人は自然の恵みを「カミ」として崇め、稲を「イノチノネ」として尊び、営々として自然と共に共生し命を育んできました。山も川も草も木も悉く仏になる神になる、このような世界に争いは生じません。

式年遷宮に込められた「共生と循環」の思想が、二十一世紀における東西文明の融合を図る指導理念として求められ、その文明的使命を日本人は自覚し行動しなければならな

い。

秋が到来している。また、宮々として、この精神文化を維持し継続してきた皇室の祈りの意義をしっかりと理解し尊重しなければならぬと思います。

アメリカの建築家アントニオ・レイモンドは「環境と生活文化を両立させる新宮には、永遠の未来を約束する知恵とシステムが存在する。世界で一番古くて新しい」と絶賛している。

式年遷宮では、神殿の造営とともに装束や神宝のすべてを新調します。神殿の造営には、およそ三〇〇年前の木曽檜をご用材として使用し、伐採と同時に苗木を植林します。松や杉などの人口林は人の手で管理しなければなりませんので、結果として環境が維持されるわけです。解体されたご用材は全国の神社に下げ渡されたり、お守り札として再利用され、

装束などの服飾品五二五種で一〇八五点、神宝一八九種四九一点などを当代一流の職人や技術者により新調します。ここには、後継者の育成や伝統文化の維持発展が二十年毎に繰り返され、それが永遠に継続されていくシステムであるということです。勿論、五十鈴川に架かる「宇治橋」も架けかえられます。二十年毎に生まれかわる瑞々しい魂の蘇りの祭りであるということができます。式年遷宮に込められた「共生と循環」思想は、照葉樹林文化が育んだ先人の英知であり、人類の遺産でもあります。

啐啄坊亮善

